<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>タイトル</td>
<td>ハノイ昇龍（タンロン）城の立地環境</td>
</tr>
<tr>
<td>著者</td>
<td>上野 邦一</td>
</tr>
<tr>
<td>引用</td>
<td>都城制研究（9）東アジア古代都城の立地条件 （奈良女子大学古代学術研究センター）、pp.69-76</td>
</tr>
<tr>
<td>発行日</td>
<td>2015-03-27</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://hdl.handle.net/10935/4125">http://hdl.handle.net/10935/4125</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>

Nara Women's University Digital Information Repository

http://nwudir.lib.nara-w.ac.jp/dspace
ハノイ昇龍（タンロン）城の立地環境

1. タンロン皇城遺跡 発見と調査

タンロン皇城遺跡とは、ベトナムの首都ハノイの市街地で2002年からの発掘調査で発見された宮殿跡の遺跡である。発見当初は、発掘調査の地番を遺跡名としホアンデュウ18番地遺跡と呼ばれていたが、2010年、世界遺産に登録され、その時に用いたタンロン皇城遺跡の名が今日の呼名となっている（図1）。

タンロンとは漢字で昇龍と書き、ハノイ（河内）の旧称である。1009年に李朝が政権を確立し、翌1010年に都を丁朝・前黎朝のニンビン省のホアルーからタンロンに遷都したことから史実から分かっている。その後、タンロンは歴代の王朝の都となり、また最後の王朝である阮（グエン）朝の時に、都はフエに移ったが、その間は副都として存続し、千年の間、ベトナムの政治・経済・文化の中心であった、といえよう。

ホアンデュウ18番地の一画には国会議事堂があった。この建物の建て替え計画が発表されること、この建物がかつてタンロン城の中心部であった可能性があり、工事着工前に発掘調査を行う必要がある、という研究者の要請から、急遽発掘調査が行われた。発掘調査を行ったところ、宮殿跡が良好に残り、かつ数世紀の宮殿跡が重複して見つかったのである。そのうちの重要な遺構は李朝のものと判断された。発見した遺構群が李朝の遺構であるとすると、この地に都を遷都した時の、当初の宮殿跡になる。研究者たちは、国会議事堂の建設計画を見直し、この地区の保存を訴えたのである。

経済の曲折を経て、国家議事堂の建設予定地は縮小し、発掘調査区の大半は保存することが決まり、2010年には世界遺産に登録された。
中国の古代都城の影響を受けた東アジア諸国で、前近代の都城の多くには、通常、宮殿域と都市域とがある。タンロンでは、宮殿域の範囲や形状、都市域の範囲や形状も正確には分かっていない。世界遺産に登録された範囲は、宮殿域の中心部に近いただろうが、発掘調査区は一部にとどまっているので、宮殿域の全体の様相は分からないことが多い。

遺物のうち、陶磁器、瓦は高品質のものが多く、その量は膨大である。飾り瓦に大型のものがあり、建物規模が大きいのでないか、という示唆を与える。陶磁器・塗の文様に五本指の箆をあしらうものが出土している。

2. ベトナム略史とハノイ

タンロン皇城遺跡を理解する上で、ベトナムの略史を述べておく。

ベトナムでは李朝の直前、10世紀中頃から末にかけて吳朝、丁朝、前黎朝と短命な王朝が複数あり、その以前は「大羅朝・北属期」と呼び、中国の支配を受けていた時代である。ハノイを含む北部ベトナムに、中国は1323年（元鼎6年）に交州を置き、この時以来長くこの一帯を支配した。中国の唐代に、この地域の支配の拠点とした安南都護府は現ハノイにあったと考えるのが通説であるが、ハノイのどこであるかは確定していない。

長い中国の支配を受けた後、いくつかの王朝を経て、1009年に李朝が、その後1225年に出雲が起き、陳朝の後、1306年には短命な胡朝があり、タイノア省にあるタイノーニャーに向ってへ戦国に都を移している。都の後約20年間、中国の支配を受けている。1428年に黎朝、19世紀1802年になって阮朝が起ころるが、1887年から1945年までの間、ベトナム全国はフランス植民地となる。植民地支配と阮朝とは、1945年まで併存していて、実効
支配はフランスが行う。阮朝最後の第十三代皇帝バオダイ帝は1997年にパリで没している。現在も皇帝の一族はフエにいて、尊敬を集めている、と聞く。

現在ハノイの市街地では、地図や航空写真から旧宮殿城跡が明瞭に認識出来るが（図2）、この宮殿城は阮朝に建設されもので、フランス人技術者の指導の下で、ヴォーバン式と呼ばれるヨーロッパ風の城塞であった。

タイン・ニュー・ホーでは、タンロン皇城遺跡と同じ飾り瓦、刻銘レンガが出土している。建築資材を運んだと考えられる。【大越史記全書】の光泰10(1397)年11月の条には「(前略)大安諸宮殿園瓦大材、悉付慈廉、南策等州、運往新都、遭風沈溺過半。」とあって、建築資材を運び失った様子を記録する。失った資材もあるだろうが、タンロンから新都へ建築資材を運んで宮殿群を造営したことは間違いないだろう。

3. タンロン皇城遺跡の遺構の概要

タンロン皇城遺跡では李朝の遺構が明瞭で残りが良く（図3）、李朝前後の遺構もあるが、李朝の時期よりも密度が薄い。その理由は明らかではないが、陳朝時代には李朝時代の建物を利用し続けたという事情も一つの理由であろう。李朝以前の遺構は、唐代の安南都護府の遺構の可能性があるが、考古学上の確証は得ていない。

遺構には建物の柱跡を示す基礎地業が多数あり、この痕跡から当時の建物は軸組木造建築であったことが分かる。軸組木造建築とは、壁を構造体とせず、柱と梁などで構造体をつくる建築をいう。建物跡のほかに、溝、井戸などがあり、複雑に重複している。城の地業や、意味不明の貝殻敷もある。

ベトナムに李朝・陳朝に遙る木造建築は現存していない。しかし当時の建築の様子を伝えるものに建築型土製品がある。タンロン皇城遺跡からもいくつか建築型土製品の断片が出土している。これらの建築型土製品は、組物を使っていることが、現存する黎朝以降の建物と異なる点として注目される。すなわち、李朝・陳朝の宮殿建築は、組物を用いていたと、私は考えている。

発掘地は大きく、A—E区に区分されていて、そのうちE区の発掘調査は外国人の観察が許可されなかった。A—D区の李朝期の遺構を観察すると、建物全体が計画的に配置されていることが分かり、建物一棟一棟も、互いに換算して完数で納まるよう設計

図3 タンロン皇城跡李朝時期の遺構図
されている(1)。

A 区と D 区で検出した六角形構築物は、東と西で対称に配置されていると考えられ、A区 - D 区の遺構配置を考えると、A 区 - E 区の遺構群の中軸は C 区にあることが指摘できる。遺構図には空白部分があるが、遺構がないのではなく未発掘地を含むので、将来調査が進めばタンロン皇城の全体像がさらに明らかになるだろう。発掘調査区は、宮殿域の中心部分であろうが、宮殿域のどこにあたるかは分かっていない。宮殿域の範囲も不明である。

遺構のうちには、溝が設定されていて、暗渠もあり、宮殿域の排水システムが周到に計画されていたことを示す。後述するように、宮殿域は微高地であるが、この一帯は沼地であり、排水は必須の装置であっただろう。

4.『大越史記全書』、『大越史略』の記述

『大越史記全書』と『大越史略』という陳朝に編纂された史料がある(2)。タンロン皇城遺跡の概要を知る上で重要な史料である。

『大越史記全書』の順天元(1010)年の条には、ホアルー（華閹）からタンロン（昇龍）に遷都する理由として、ホアルーは狭く、皇帝が住むには不十分であるのに対し、タンロンの地は「況高王故都大羅城、宅天地区域之中、得龍蟠虎踞之勢、正南北東西之位、便江山向背之宜、其地広而平、厥土高而爽垲」という記述があり、都にふさわしい地であるとす る。そして、移動中に「黃龍」が現れたので、この地をタンロン（昇龍）と呼ぶことにしたのである。黄龍は、四神の中心に居る神物であり、神物のうち最も格上に位置づけられている。
この地は「高王故都大羅城」とあるように、高麗が築いた城壁がすでにあったようである。『大越史記全書』
866年11月の条に「(前略)鷹浹海軍於交州、以鷹為節度使。(中略)築羅城(後略)」という記述がある。高王とは高邇のことで、彼は南詵が支配していたベトナム北部を、唐の支配に戻り戻した人物で、9世紀中頃に交州に城壁を築いて、支配の拠点とした。この拠点を「大羅城」と呼んだのである。発掘調査区や李朝以降の都城が、この大羅城とどれほどの範囲で重なっているのか、いないのかは分からない。しかし、唐代に築いた城壁を利用し、タンロン皇城を造営したことは認められよう。

阮朝の都城フエはベトナムの風水思想に則って建設され、ベトナム独自の陰陽思想を加味して建設した都市である(6)。『大南一統志』に都市建設にまつわる記述がある。また、タイン・ニャー・ホーの南郊壇の事例などから、タンロン以後の都城の建設を考えると、タンロンもベトナムの風水思想に則って建設されていると考えて良いだろう。

5. 地図

タンロン皇城の様子を図示する「洪徳版図」という絵図がある(図4)。黎朝の洪徳

![図5 1873年のハノイ地図](image-url)
21(1490)年に作成された図で、タンロン皇城の様相が分かる最古の図である。
また、阮朝第四代の嗣徳帝（トゥドック帝）26(1873)年のハノイ地図（図5）を見ると、
当時のハノイの様子が分かる。
「漢徳版図」の表現は形式化されているが、宮殿域の建物配置が分かる。中心建物に敬
天殿があり、その南に朝倉、端門があり、東に東宮、東南角に太廟を配置する。宮殿域の
南に国子監、南郊殿などが見え、都城のおよそその様子が分かる。
1873年の地図では、発掘した宮殿域とその周辺、すなわちタンロン皇城の宮殿域は、微
高地であることが分かる。グエン朝の宮殿域の東に旧市街地があり、この一帯も微高地で
ある。宮殿域の南一帯は、湿地帯で、フランス植民地時代に土地整備が進み市街地が拡大
し、現在のようなハノイが成立して行った。
『漢徳版図』の宮殿域内には、人工池三ヶ所と自然池ニヶ所があり、1873年の地図も宮
殿域内に多くの池を描く。遺構でもA区に陳朝に築かれた方形池があり、さらに黎朝には
A区・B区の間に水路を描っている。排水路を計画的に配置していることから見て、宮殿域
は微高地であるが、この一帯も湿地帯であったのではないだろうか。

6. 中国との共通性 ベトナムの独自性
ベトナムの歴代都域の様相は分かっていないことの方が多い。したがって、現時点では
東アジアの都域との比較研究は、断片的な指摘にならざるをえない。
タンロン皇城の南郊壇、太廟は近年の発掘調査で発見され、位置が確定している。また、
『大越史記全書』や『大越史略』などにも、南郊壇、太廟に関わる記述がある。
タイ・ニャー・ホーとも、近年発掘調査がすすみ、宮殿域の南数キロメートルほどの
丘陵地に南郊壇を見出し、全体像を明らかにした。『大越史記全書』光泰10(1397)年正月
の条に「(前略)相度清化府安孫洞、築城鑾池、立廟社、開街巷、鉄織都邦。」とあり、タイ
ニャー・ホーは太廟・社稷壇などを配置した都市であったことを示唆する。また、
『漢徳版図』から黎朝のタンロン皇城には南郊壇、太廟があったことが分かり、中国の都
域の考え方を取り入れていることを示唆する。しかし、これらの都城遺跡は都市域が不
明確で、形状は不整形である。墓聳目状の道路は確認できていない。一方フエでは、南郊
壇、社稷壇が残っていて、都市域に直交する道路網を認めることが出来る。
タンロン皇城遺跡の発掘調査で出土したレンガの中に、チャム文字を刻んだものが数点
ある。まだ読解できていないようであるが、チャム人が造営に関わったことが想える。ベ
トナム南部にはチャム族が建設した複数の前近代都市があり、タンロン皇城遺跡との異同
も研究課題と考えられる。
出土瓦のうち、菩提樹の葉を立て上げた軒丸瓦があり、他に例がなく独特である（図6）。
また陶磁器・塚の文様に五本指の龍を持つものが複数あり、中国の「五本指の龍は皇帝に
のみ用いる」という考えを採用している。
7. むすびにかえて —いくつかの考察—

ハノイの地はベトナムで長く政治・経済・文化の中心であった。最初にここを政治支配の拠点としたのは中国・漢で、中国と南海との交流ルートに当たり、その拠点としたからであった、と言われる。前述の通り、この地域は湿地帯で、ここを支配の拠点とした明確な理由は不明である。交易の拠点だとすると、内陸部に入り過ぎてはいないか、という疑問が生じる。ただ、ベトナム中部のチャンパの都城チャキュウも内陸部で、外港として海岸沿いにホイアンを構えていた。ハノイも、外港としてハイフォンがあり、内陸部の政治拠点と海岸部の外港という考えが定着していたのかもしれない。

北部ベトナムは長く中国の影響を受けてきた。宮殿域を方形にし、南郊域、太廟を祀るのは中国風であると言えよう。また、都市の立地決定を風水思想によっていたと説明するのは、中国の都市の考え方を反映していると言える。しかし、ベトナム独自の陰陽思想も反映しているとも言われ、中国・ベトナムの理念が混じりあったものを都市の理念とし、立地を説明しようとしているのである。フエには都市域があり、格子状の道路が確認出来る。しかし、フエを除く都城では、都市域が不明で、中国の都城に似ているとは思えない。

ベトナム南部にはチャム族が造営した都市遺跡が点在する。これらの都市は、方形を基調しながら完形ではなく、部分的に歪みをもった形の都市が多い。こうしたチャム族が造営した都市との比較検討や、中国南部の都城との異同の検討などは、今後の研究課題である。

ベトナム都城の研究は、緒についたばかりで、今後の研究の進展が望まれる。
注
(1) 井上和人「越南河内昇龍皇城遺跡の宮殿遺構」『日越タンロン城関連研究論集』(東京文化財研究所 2012 年)。
(2) この二つの史料の成立については桃木至朗氏が詳しく考察している（桃木至朗『中世大越国家の成立と変容』(大阪大学出版会 2011 年)）。
(3) 大田省一「インド・中国文明周縁世界の都市」『アジアからみる日本都市史』(山川出版社 2013 年) 参照。

その他の参考文献
(1) 『ハノイ 1000 年王城─地域情報学と探る─』(京都大学・東南アジア研究所 2006 年)
(2) Tong Trung Tin, Bui Minh Tri “Thang Long-Ha Noi” (Vietnam Academy of social science,2010)
(3) 桃木至朗代表科研報告書『中・近世ベトナムにおける権力拠点の空間的構成』(2011 年)
(4) 拡稿「日本の古代都市における儀式空間についての予察的研究」『古代学』3 (奈良女子大学古代学学術研究センター 2011 年)

図出典一覧
図 1・図 3・図 6 参考文献 2
図 2 Google マップより作成
図 4・図 5 ベトナム社会科学院考古院所蔵図